NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

October 2010　vol.12

島根県立石見美術館ニューズレター

島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

企画展 開館5周年記念展Ⅱ「ロボットと美術　機械×身体のビジュアルイメージ」

ロボットの「すがた・かたち」を考える

企画展「島根県立美術館名品展　夕日につつまれる湖畔のミュージアムから」

島根県立美術館のコレクション

開館5周年を迎えて

石見美術館をふりかえる

12

相澤次郎《カメラマンロボット「太郎」君》
財団法人日本児童文化研究所

相澤次郎《モデルロボット「五郎」君》
財団法人日本児童文化研究所

相澤次郎《ガイドロボット「一郎」君》
財団法人日本児童文化研究所

企画展

開館5周年記念展Ⅱ「ロボットと美術　機械×身体のビジュアルイメージ」

2010年11月20日(土)～2011年1月10日(月・祝)

休館日：火曜日(ただし11月23日は開館)、11月24日、12月28日～31日、1月1日
開館時間：午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

A

B

A. 古賀春江
《現実線を切る主智的表情》
1931年
西日本新聞社蔵
(福岡市美術館寄託)

B. 学天則と西村真琴(左)
写真提供：松尾宏氏

ロボットの「すがた・かたち」について考える

あなたが「ロボット」ときいて思い浮かべるのは、どんな形のものだろう。「鉄腕アトム」のような愛らしい少年の姿だろうか、あるいは「鉄人28号」や「機動戦士ガンダム」のような戦う巨大ロボットだろうか。現実の世界にはASIMOのような人気者が存在する一方、工場で働く腕だけのロボットもある。

もしも紙と鉛筆を渡されて「ロボットを描いてみて」と言われたら、あなたはどんな絵を描くだろうか。好きなキャラクターをイメージした絵を描く人もいるかもしれないが、四角や丸を組み合わせて相澤次郎のロボット(表紙)のような姿を描いてしまう人も、多いのではないだろうか。このようにロボットは他の機械――例えば乗物や家電製品――に比べ、イメージの振れ幅がかなり大きい。

「ロボットと美術　機械×身体のビジュアルイメージ」展は、20世紀初頭から現代までのロボットにまつわる造型を集め、ロボットと日本文化の関わりを探る試みだ。上述のとおりロボットの概念があまりに広いため、本展では主に「人がた」のロボットを扱うこととした。さらに科学博物館や博覧会ではなく美術館で開催するロボット展として、テクノロジーではなく「人間の似姿(にすがた)を表現する行為」や「機械の中に美を見いだす感覚」について考えることとした。サブタイトルを「機械×身体のビジュアルイメージ」としたのは、そのためである。

全体を大きく戦前編と戦後編に分け、戦後編ではアニメやゲームなどで人気を博したロボット、ロボットに影響された美術作品、そして現在開発されているロボットを紹介する。

こうしたロボットたちの源流を探る戦前編では、「機械×身体」という観点から集めた20世紀前半の美術作品をご覧いただく。「ロボット」という言葉と概念は、1920年にチェコの作家カレル・チャペックが、人間に代わる人造の労働者として戯曲『R.U.R.』に描いたのが最初である。1920年代は大量生産・大量消費社会の到来や第一次世界大戦の惨禍により、人類が機械の威力を実感する一方で、機械に制圧されるのではないかという恐怖を抱き始めた時代だった。同時に美術の世界では、キュビスムのように人体を幾何学的にとらえる表現や、未来派のように機械のパワーやスピードに美を見いだす思想が誕生した。こうした時代背景のもと、ロボットは瞬く間に世界中に広まったのである。

ところでチャペックが描いたロボットは、機械ではなく、バイオテクノロジー的な技術で作られた「人造人間」だった。しかし当時はそうした技術がなかったため、実際には甲冑のような形や、箱や管を組み合わせによるロボットが誕生することとなった。甲冑型のロボットは1931年の古賀春江の絵(図A)にも描かれ、さらに戦後の「鉄人28号」や「マジンガーZ」にも繋がっている。また、箱や管の組み合わせ、つまり容易に入手できる材料で作られたロボットは、戦前からロボット工作のテキストを執筆していた相澤次郎によって大衆に広められ、玩具や漫画・アニメのキャラクターや、博覧会の展示物として多くの人に愛されてきた。

そんな中、人間の似姿としてのロボットを制作した日本人がいた。1928年に西村真琴が発表した日本初のロボット「學天則」(図B)は、肌は金色で大きさは人の倍程度、面貌は様々な人種の特徴をあわせたという「理想の人物像」だった。空気圧で表情や手を動かすことができた學天則に西村がさせたのは、労働や芸ではなく、思索する表情ものを書く動作だった。西村は學天則を芸術として作ったと述べた。そして現在、人間そっくりなロボットを開発している研究者は、「人間を知るためにロボットを研究している」という。

展覧会で様々な姿のロボットを見ながら、ロボットの「かたち」や、ロボットと私たちの生活との関わりについて考えていただければ、企画者として嬉しく思う。

(川西由里　当館主任学芸員)

「島根県立美術館名品展　夕日につつまれる湖畔のミュージアムから」
2011年2月9日(水)～3月21日(月・祝)
休館日:火曜日
開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企画展

図1

図2

図1. ギュスターヴ・クールベ
《波》
1869年
島根県立美術館蔵

図2. 菱田春草
《秋景(渓山紅葉)》
1899(明治32)年
島根県立美術館蔵

島根県立美術館のコレクション

東西に長い本県には、ふたつの県立の美術館が設置されている。松江市の島根県立美術館と当館である。2005年10月にオープンした当館は、今年開館5年目を迎えた。一方、島根県立美術館は1999年3月に、当館より6年7ヶ月ほど早く開館している。

今回当館で初めてまとまった数の作品を展示する島根県立美術館のコレクションは、前身の島根県立博物館の収蔵作品を引き継いで形成された。現在も建物が残るこの博物館は、松江市の県庁近くにあり、1959年に開館している。県立博物館として全国的にみても早い時期に設立され、約40年にわたって活動を続けた。そのコレクションの主要な部分は、美術・工芸品だが、歴史系や自然系の展示も行った。この県立博物館の所蔵していた作品には、地元ゆかりの作家のものが多く、島根県出身の日本画家・橋本明治と版画家・平塚運一から寄贈を受けた作品群も含まれる。また、新庄コレクションと呼ばれる多数の浮世絵版画も購入されている。これは、松江出身の個人が収集したコレクションで、葛飾北斎〈富嶽三十六景〉や歌川広重〈東海道五拾三次〉のシリーズを含むものである。

こうした博物館の所蔵品をベースに、島根県立美術館は、建設の準備段階から、以下のような重点的に収集する5つの分野を掲げて、体系的なコレクション形成を目指している。

1.「水」を画題とする絵画作品、2.日本の版画、3.国内外の写真、4.木を素材とする彫刻、5.島根の美術。

島根県立美術館の収集方針が、以上の5項目であるのに対し、当館は、森鷗外ゆかりの美術家の作品、ファッション、石見の美術の3項目である。県立最初の美術館だったことから、島根県立美術館の収集分野は、広く設定されていることが分かる。

収集方針の最初の「水」を画題とする絵画作品は、宍道湖畔に位置するという立地条件から定められたもので、島根県立美術館のコレクションの特徴となっている。絵画としては、日本画、洋画とともに、博物館では収蔵されていなかった西洋絵画が新たに収集され始めた。今回出品されるクールベの《波》(図1)、また春草の日本画《秋景》(図2)は、この収集方針に沿った「水」が描かれた作品である。

日本の版画の収集については、前述の博物館で収蔵していた浮世絵版画のコレクションと平塚運一の作品に加え、日本版画史の流れを追えるような作品収集が続けられている。現在では千点を超える作品があり、本展でも浮世絵と近現代の版画を展示する予定である。

また、山陰出身で活躍した写真家が多いことから、公立美術館のコレクションの対象としては新しい分野である写真の収集にも力を入れている。森山大道など島根ゆかりの作家の作品はもちろん、写真史上重要とされる海外作家の作品も数多く揃えている。

彫刻の分野は、米原雲海や内藤伸、そして当館館長の澄川喜一など、島根県出身の木彫作家の活躍があるため、特に木彫に重点をおいた収集がなされている。また、工芸の分野でも、島根県出身の工芸家の作品が多い。河井寛次郎は、生誕120年を記念して今年島根県立美術館で企画展が開催された安来市出身の陶芸家で、本展でも彼の作品を数点展示する予定である。

本展は、こうした様々な分野の収蔵品を誇る島根県立美術館のコレクションの特徴をよく表した展示となる。通常、島根県立美術館2階で、分野ごとに展示している日本画、洋画、西洋絵画、浮世絵、近現代版画、工芸、写真、彫刻の約100点の作品を一堂に紹介する本展によって、島根県立美術館の選りすぐりの名品をご堪能いただきたい。

(河野克彦　当館主任学芸員)

ごあいさつ

開館5周年を迎えて

石見美術館をふりかえる

この秋、当館が開館5周年を迎えることができました。これもひとえにこの美術館を支えてくださったみなさまのおかげと感謝申し上げ、この場をお借りして衷心より御礼申し上げます。

美術館が開いてからは満5年ですが、この美術館の構想が持ち上がったのは、平成3年までさかのぼります。今、ここで少しその経緯をふりかえってみたいと思います。

「石見に美術館を」という県民の思いを受け、平成3年1月に博物館整備に関する提言が有識者から出されます。当時は《海のみえる美術館》という構想が打ち出されました。それと相前後して、益田市民による熱心な美術館誘致活動が起こります。その願いが実り、平成6年に美術館を益田市に建設することが決定され、平成9年度に基本構想が検討されます。この時点では、まだ美術館単体の施設として検討されていました。しかし、平成11年に同じ益田市内にある県立石西県民文化会館の老朽化をふまえて、美術館とホールの複合文化施設として整備されることとなり、あわせて利便性や文化的環境に配慮して、現在地に建設されることが決定されました。平成12年からは、複合文化施設としての基本構想が新たに検討されます。平成13年には、建物の設計競技が実施され、内藤廣建築設計事務所の案が選定されます。現在の石州瓦を28万枚用いた建物はここで決まったのです。平成14年から建設工事が着工され、2年11ヶ月の工事期間をかけて平成17年9月に完成、10月オープンとなりました。

この間、最初の提言から約14年の月日が流れています。もっと言えば、平成3年の提言が成される以前からこの美術館を切望し、力になってくださったたくさんの方の存在もあるでしょう。中には美術館の完成を見ずに故人となられた方々もいらっしゃいます。開館5周年は、そうしたすべての方の思いを含んだ5周年です。美術館を預かる我々は、こうした皆様の思いをしっかりと受け止め、この節目の時に新たな気持ちで今後も皆様に愛される美術館を目指してがんばって参りたいと思っております。今後とも、皆様のさらなるご支援を心よりお願い申し上げます。

（真住貴子　当館学芸グループ課長）

島根県立石見美術館ニュースレター
2010年10月12日 発行

〒698-0022 益田市有明町5-15
TEL: 0856-31-1860 http://www.grandtoit.jp